

6 歌川 広重

駿河薩夕之海上



本図は、広重が北斎「富嶽三十六景」に対抗して描いたといわれる「富士三十六景」の中の一図。東海道の由井宿と興津宿の間に位置する薩夕峠の辺りから駿河湾越しに富士山を望む絶景は、近景の高く飛沫をあげる波と遠景の駿河湾の穏やかさの対比が印象的である。岩にぶつかって弧を描いている波頭は、北斎の名作「神奈川沖浪裏」を彷彿とさせ、北斎に挑もうとする広重の気概が感じられる。

(33.6×21.5)

7 葛飾 北斎

隅田川関屋の里



関屋の里は、隅田より千住河原までの一円の地をさし、江戸時代には風光明媚な土地として知られていた。北斎は、堤を馬で疾走する旅装姿の3人の武士を躍動感あふれる筆致で描いたのに対し、遠景には静かで雄大にそびえる富士を据えている。極端なほどの静と動を同じ画面に配置し、その対比を無理なく見せてしまう北斎の画力の高さを堪能できる名作「富嶽三十六景」の一枚である。

(24.8×37.2)

8 喜多川 歌麿

鶉に雲雀



美人画の大家として有名な歌麿だが、動植物画においても卓越した才能を発揮した。本図は、寛政2年に版元葛屋重三郎から出版された狂歌絵本「百千鳥(ももちどり)」からの1図。春の訪れを告げる雲雀、土筆やすみれの花が繊細に、そして淡い色調で表現された上品な花鳥図で、当時狂歌に興じた好事家たちを魅了した作品である。

(23.0×37.4)

4 東洲斎 写楽

嵐竜蔵の金貸石部金吉



寛政6年(1794年)月都座で上演された演目「花菖蒲文祿曾我(はなあやめぶんろくそが)」の中で嵐竜蔵が演じた「金貸石部金吉」を描いた作品。真一文字に力強く引き結ばれた口元、斜めになった眉毛と目のにらみ、そして袖をまくりあげる役者の構えはまさに「見得」の瞬間をリアルに表現されている。写楽の代表作といわれる黒い雲母を用いた背景に上半身のみ描いた大首絵28点の中の秀作といえる。

(38.0×25.0)

5 溪斎 英泉

うわき相



溪斎英泉は、幕末に活躍した絵師で、広重との競争「木曾街道六拾九次」を初めとした風景画の傑作を多く発表したが、美人画においても独特の画風を確立している。本図は、女性の見せる豊かな表情を見事に描写した連作「今様美人拾二景」の一図。みす紙をくわえ、小首をかき上げた艶っぽい表情の女。その惚れっぽい浮気心を見透かすように描くあたりは秀逸である。

(38.0×25.5)

■ 作品送付方法

作品は台紙付で発送いたします。額縁付作品をご希望の方は¥10,000を同封の郵便振替で送金ください。(送料は当財団で負担いたします。)

1 石松 チ明

甘ったれ sweetie



当財団が主催するアダチUKIYO大賞の第10回記念特別賞受賞作品。「不美人画」という、一種卑屈で不遜な印象すら与えるテーマを中心に描くことで、見るものに美の多様性を問うている。ペン画タッチの描線が特徴的である。少ない色数で全体を構成し、うまく表現しているところは、浮世絵の省略美に通じる。時代に沿ったテーマ設定や無駄のない表現は、まさに「現代の浮世絵」にふさわしい。

(23.3×32.9)

石松 チ明 【略歴】

1994年 静岡県浜松市に生まれ。
2012年 成蹊大学法学部に入学、司法試験を志すも、絵の道へ。
以降、不美人画家として活動。

- 2017年 初個展「初不美人画展」
- 2018年 池袋アートギャザリンク2018 栗原画廊賞
- 2018年 個展「不美人画家展2」
- 2018年 KENZAN2018 みうらじろうギャラリー賞
- 2018年 美術新人賞デビュー2019 入選
- 2018年 第10回アダチUKIYO大賞 第10回記念特別賞
- 2019年 個展「不美人画家展3」
- 2019年 個展「不美人画家展 東京」
- 2019年 ペーターズギャラリーコンペ2019 大賞(上田三根子賞・藤田知子賞)

【作家のコメント】

美しい女の子の美を描く「不美人画」や精神的な性を追い求める「マゾヒズム」を筆頭に、世間が良しとしないモロモロにきらめきを見出すべく制作しています。大事にしているのは「性死を忘れない」と「弱さを裏切らない」ことです。本作では「愛おしいものはその愛しさゆえに噛み潰したくなる」という衝動を絵にしました。生に繋がる愛と死に向かわせる暴力、相反する二者の同居にギョウギョウしていたら幸いです。

3 和田 誠

バーバレラ Jane Fonda

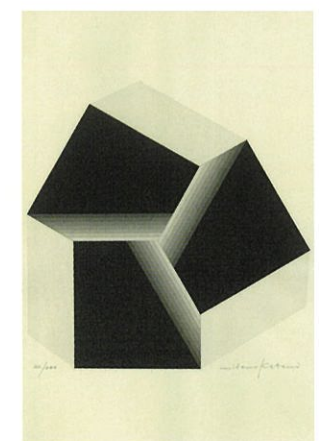


和田誠氏は、日本を代表するデザイナー・イラストレーター。2019年10月に逝去。映画監督や脚本家としての顔を持ち、幅広いジャンルで活躍した。無重力状態で宇宙に浮かぶセクシーな女性は、フランスSFコミックの世界を映画化した「バーバレラ」で主役を演じるジェーン・フォンダを描いたもので、その特徴を十分に捉えている。和田氏の描く似顔絵は、その人柄の良さがにじみ出て誰を描いても見る人を和ませてくれる。

(32.0×24.0)

2 勝井 三雄

弄 rou



勝井三雄氏は、日本を代表するグラフィックデザイナーの一人。2019年8月に逝去。1970年代後半、勝井氏は「鎖された形態」と題したシリーズで数多くの作品を発表した。本図は、その中の一図。黒の濃淡のみで幾何学形態を組み合わせたデザインは、和紙と墨の素材の持ち味を最大限に引き出している。ブックデザインに多く携わり、印刷媒体に対して、繊細かつ厳しい目を持った勝井氏ならではの木版画作品である。

(40.0×26.5)